魔法少女リリカルなのは～音撃を使う鬼神～

オプティマスプライム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは～音撃を使う鬼神～

【Ｎコード】
Ｎ０５０１Ｓ

【作者名】
オプティマスプライム

【あらすじ】
リリカルなのはの世界に来てしまった鬼《新藤誠》の魔法と音撃が放つ物語です。

完結編に向け奮闘中です！！

見てくれたかたは何か感想などがあればどうぞ！！

前回の小説から続きを見たい方は、鬼神と呼ばれし戦士を見てください！！

プロローグ《これが、響鬼》（前書き）

機種変更で、別投稿になりました。

これまで読んでくれた方。

お待たせしました。

ユーザ登録はこちらからお願いします。

白米さん、武のあだ名集。もう一回お願いします！！

プロローグ《これが、響鬼》

１２月２２日

海鳴市近海海上

「マコッチ！？マコッチ！？お～い！起きろーーー！」

巨大化した茶色大鷲に先ほど、闇の書の意思から弾き出された誠をフェイスオフ状態のシュウキがまっ逆さまに落下しているの誠を拾い上げた。だが、誠は目をつむっており、気絶していた。

仕方ないのでシュウキは誠の頬を平手打ちでビンタする。

「っガッ！？な、何してんだお前！！」

ビンタされた頬を押さえて、シュウキに叫ぶ誠。フェイスオフとはいえ、鬼の力は健在である。

「昼寝タイムは終わりだぜマコッチ」

「誰が昼寝だ！？俺は！！……って、はやて達は！？」

「落ち着けマコッチ。俺も状況はよく掴めてないけど、さっきなのはちゃんとフェイトちゃんが砲撃魔法で彼女（闇の書の意思）を攻撃したら、白い光が出たと思ったらいきなりマコッチが落ちてきたんだよ」

「白い光？だとしたら、はやてとリインフォースは！？」

「リインフォース？」

「夜天の書の名前だ！で二人は？」

「はやてちゃん達ならあそこだけど」

シュウキが指差した方向を見る。そこには、はやてが槍のような杖を持ち、騎士甲冑を見にまとっていた。そして、その回りには。

「シグナム、ヴィータにシャマル、ザフィーラ！？」

そこには、ヴォルゲンリッター全員が復活を果たしていた。はやてが脱出と同時にヴォルゲンリッター全員のリンカーコアを送還した

ため、破損した守護騎士システムを修復した。

ちょうど今、ヴィータが泣きながらはやてに謝っている所だ。

「何だか、よくわからないけどよかっ……って何だあの巨大な黒いのはぁぁぁぁ！？」

シュウキが今度ははやて達の後ろにある巨大な黒い物体を見て絶叫する。

「お前気付いてなかったのか？」

「いや、マコッチを拾い上げるのに目がいってたから……」

「マコッチじゃない！！あれはな『『『誠（くん）！！』』』！？うわっ！？」

突然、耳元で名前を呼ばれて驚く誠。そこには、さっきまで向こうにいたはずのなのは、フェイト、はやてがいた。その後ろには、ヴォルゲンリッターの面々、アルフ、ユーノがいた。

「お前たち、いつの間にこっちに！？どうみても距離があるだろ！

！」

「そんなことは、今はどうでもいいんや！！」

「誠、大丈夫なの！？」

「誠は馬鹿だよ！！こんな無茶して！！心配したんだよ！！」

はやてが誠の言葉を無視して、なのはとフェイトが涙目で声をかける。

「だ、大丈夫だ。大した傷はないし」

「でも、頭から血が！？」

「え？だあああぁぁぁ！？そうだった、すっかり怪我が治ってるって勘違いしてた！！」

頭を抑えて出血を止める誠。見た目は重傷なのに、今まで忘れてたで済ます誠は一体……

「誠くん待っててな！！シャマルお願いや！」

「はい！！クラールヴィントお願い！！」

シャマルの指にはめている指輪が光ると誠を包み込んだ。
すると、誠の傷が治癒されていく、ご丁寧にボロボロになった服まで。

「傷が……ありがとうシャマル」

「いえ、誠くんには助けて貰ったからお安いご用よ。それにこれが私の本業だから」

シャマルに礼を言う誠。
すると、先ほどからシグナムとヴィータがモジモジしているのに誠が気づく。

「ま、誠……その、私は……」

「あたしも……その」

「言いたいことがあるなら、あとで聞くぞ？それより、今はあれだろクロノ？」

「その通りだ。みんな聞いてほしい」

クロノが上空から現れる。みんながクロノの方を見る。

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。時間がないので簡潔に説明する。あそこの黒いよどみ。闇の書の防衛プログラムがあと数分で暴走する。僕らは何らかの方法で止めないといけない。一つは極めて強力な氷結魔法で停止させる。二つ目は軌道上に停止させている艦船アースラの魔導砲（アルカンシェル）で消滅させる。これ以外で他にいい手段はないか？」

クロノがあらかたの説明をした。
シャマルが異論があるようで手を上げた。

「え～と、最初のは多分無理です。主のない防衛プログラムは魔力の塊みたいなものですから」

「凍結させても、コアがある限り再生機能は止まらん」

シグナムが付け足すように続ける。

「アルカンシェルも絶対ダメ！こんな所にアルカンシェル射ったらはやてのぶっ飛ぶじゃんか！！」

ヴィータが手で×を作って、否定する。

「ユーノくん。アルカンシェルってそんなに凄いのか？」

シュウキがアルカンシェルのことをユーノに聞く。

「発動地点を中心に空間湾曲しせて消滅させる。って言えばわかりましか？」

「はあ～……わからない」

「要は、波動砲が射たれるってことだ」

誠がシュウキに言う。

「何！？そんなもん射ったらとんでもないことになるだろ！？」

そう行ってユーノの肩を掴んでブンブンするシュウキ。ユーノは目

を回す。

まあ、アルカンシェルがとんでもない武器と知ったなのは達は反対の声を上げる。

「僕も艦長もアルカンシェルなんて物は使いたくないんだ。他に方法があれば、それを優先したい。何かないか？守護騎士たちにも聞きたい」

「すまない、あまりいい案はない」

「我らもあまり、防衛プログラムの暴走に立ち会ったことがないのだ」

「そうか……」

残念そうにするクロノ。暴走臨界点まであまり時間がない。

すると、痺れをきらしたアルフが空中であぐらを書いて言う。

「あ～も、焦れったいなあ。みんなでガツンとぶっ飛ばすわけにはいかないの！？」

「ア、アルフ。そんな簡単な話じゃ（汗）」

シュウキから解放されたユーノがアルフの無茶発言に冷や汗をだす。

「いや、アルフのはいい案はだ。俺もそれしかないと思った所だ」

誠がみんなの方を見て言う。皆はアルフの無茶発言が通るとは思わず唖然とする。

「ってマコッチ。確かにぶっ飛ばすことに越したことはないけど、相手は未知数なんだぜ？」

「あのな～？俺たちは鬼だぞ。常にワケわからん相手をしてんだぞ俺たちは。あの防衛プログラムは色々な生物の融合体だからな」

「え？そうなの？」

「えっと、集めたリンカーコアが魔法生物がほとんどですから……」

「要は、様々な魔化魍の融合体ヌエと一緒って考えろ」

「ああ。ヌエね」

「「「（ヌエって何なんだろう……）」」」

ヌエを知らないなのは達は顔を傾げる。

「そういえば、あの防衛プログラムにもバリアとか張ってあるのか？」

誠が守護騎士とはやての方を見て質問する。

「うん。防衛プログラムのバリアは魔法と物理の複合四層式や」

「なら、そのバリアを破壊するにははやて達の魔法攻撃で破壊して貰うしかないな」

「ちょっと待て！？まさか君は！！」

クロノが誠が何をするきなのかわかった。

「そして、防御を失った防衛プログラムに俺が音撃でぶったおす。勿論、お前も一緒に突撃だぞシュウキ」

「えええっ！？俺もか！？」

「当たり前だ、お前以外誰が行くんだ？」

「いや、まあそうだよな。わかったよ」

「決まりだな。というわけだからなのは達は……」

「何いってるの誠くん！？死んじゃうかも知れないんだよ！！」

「今回の相手はこれまでとは違うんだよ！！誠は無茶ばっか、しすぎだよ！！」

「そうや、誠くんは私らを助けてくれたんやから、今度は私らが助ける番や！！」

なのは、フェイト、はやてが続けて誠の無茶な行為を止めようとする。

「勘違いするなよ。俺は別に死ににに行くわけじゃない。なのはにフェイトにはやては忘れたのか？俺は……」

誠は、懐から何かを取り出す。シュウキはそれを見て「えっ！？」と声をあげて驚いた。他の者は何なのかわからずただ見た。

誠はそれを軽く振ると、二本の棒が出る。それを自分の指に軽く当てる。すると、キイィィィンと音が共鳴する音がなる。それを額にかざすと、誠から紫色の炎が上がる。回りの者はは突然の出来事に驚いた。しかし、この現象をなのはとフェイト達は知っている。しかし、あの時は真っ赤な炎だったはず。

「マコッチ。まさか……」

そして、誠は纏った炎を振り払う。そこには、縁取り・腕の色は赤色で体色は紫色をベースにした音撃戦士。その名は音撃戦士なら誰もが知っている鬼。名は……。

「俺は……鬼…音撃戦士《響鬼》だからな」

遂に現れた音撃戦士・響鬼。そして更に別の世界の住人は彼のことを仮面ライダー響鬼という。

『少年……響鬼。託したからな……』

次回続く

プロローグ《これが、響鬼》（後書き）

次回……

決戦…防衛プログラム

ついに響鬼へと変身を成し遂げた誠。

そして、解放する響鳴響鬼とは？

感想待っています！

プロローグ・弐（前書き）

名言集　アニメｏｒドラマ

今回は

『人々が思い続けてくれる限り……俺たち仮面ライダーは不滅だ！！』《オーズ・電王・オールライダー・レッツゴー仮面ライダー／仮面ライダー１号／藤岡弘、》

映画見てきました。確か、こんなセリフだった気がします。

内容はネタバレなので余りいいませんがオールライダーでした（汗）

プロローグ・弐

「マコッチ……どうやって、響鬼に……」

「シュウキ、今は無駄話をしてる場合じゃないだろ。皆も突っ立ってないで、始めるぞ。だろ、クロノ？」

「え…ああ、そうだ。皆、とりあえずここは誠を信じてやろう」

「そうだな」

「じゃあ、まずはあのバリアを破壊しないとな」

「それなら、あたしたちがサポートに回るよ」

「うん」

「ああ」

アルフ、ユーノ、ザフィーラがサポート班として援護に回る。そして、なのはたちもバリア破壊として、攻撃する準備を始める。

しかし、まだ三人娘は誠の案には納得していない様子だが…

「まだ、納得してない顔だな」

「当たり前だよ。誠は…」

「俺はお前らを信じる。だから、お前らも俺を信じてくれ」

「誠くん……」

「なら、きいつけてや！！」

「ああ！！そっちは任せたから、ほら行くぞシュウキ！！」

「って、それ俺のディスクアニマル！？勝手にてな付けるなよ！？」

誠はそのままシュウキの茶色大鷲を連れて、下へと降りて言った。

「フェイトちゃん、はやてちゃん。私ね、誠くんには助けて貰ってばかりだから……」

「わかってるよ、なのは」

「うん、だから誠くんが戦わんでええように、私らで防衛プログラムを止めるんや！！」

「うん、行こう！！」

なのはの掛け声と共に、必ず防衛プログラムを倒すと誓い合うフェイトとはやて。

三人はそれぞれのポジションに向かっていく……

ＳＩＤＥ　フェイト

「始まった……」

ついに、防衛プログラムの暴走が始まった。

やっぱりユーノが言った通り、色々な魔法生物の融合体みたいだ。
こんな大きい相手に誠とシュウキが相手をするなんて、絶対無茶だ。
でも、誠はとっても強い……

別に誠の言葉を信じていないわけじゃない。私たちを信じてくれてるんだ……あれ、これって私を信じてくれるってことだよね／／／／

あぅ、何、こんな時に変なこと考えてるの私は／／／／

ううん、この気持ちが消えないのが良いんだ／／／／
今度こそ、私が誠を助ける番なんだ！！

「次、テスタロッサちゃん！！」

！！私の番だ。なのはやシグナムが開いてくれた道。無駄にはでき

ない！！

でも、なんでだろう。誠に何か嫌な予感がするのは……

SIDE　OUT

SIDE　誠

「やっぱり、結構ごちゃごちゃな奴だな」

予想してた通り色々な奴が混ざってるようだな。

「でも、マコッチ。確かにあの防衛プログラムはヌエみたいに色々な奴が混ざってるのはわかったけど、本当に勝機はあるのか？」

「マコッチじゃない。あるから、やりにいくんだろ。大丈夫だ、なのは達がきっとバリアを破壊してくれる。そうしたら、俺とお前が全力で音撃打を打ち込む。シュウキは」

「衆牙破裂を撃ち込むって事か？」

「そうだ」

「でも、清めの音が通じる相手なのかな。あれは魔化魍じゃないだぞ？」

「絶対に効くさ。音撃は魔化魍以外でも使うことができる。例えそれでも倒せなくても、俺にはまだコイツがある」

ぶら下げている音叉・音角を手に持つ誠。すると、音角が一瞬光ると、一振りの刀が握られていた。

「それ、鳴刀？でも、まさかそれが切り札？マコッチには装甲声刃があるだろ？」

シュウキも鳴刀の存在は知っているらしく、あまり驚かない。しかし、鳴刀はあまり使われない武器。
シュウキも、まさか鳴刀が切り札なのかと少し拍子抜けの顔になる。

「確かに装甲声刃もあるが、俺はこれを試す。それにこれは鳴刀じゃない」

「え？」

「見てればわかる」

再び。音角に戻し、防衛プログラムの方を見る。

ちょうど、今まさになのは、フェイト、はやての砲撃魔法が炸裂している場面だ。

「うおっ！？こっちまで、余波が！！」

「バリアのついでに防衛プログラムも一緒に消えてくれたら有難いな」

「それだったら、うれしいけどな……」

砲撃魔法でバリアは消し飛んだみたいだが、やはり本体ははやてやクロノが石化や氷結魔法を使ったらしいが、中から新しいのが出てくる。

やっぱり内部からだな

「行くぞ、〝衆鬼〟！！」

「おう！！久しぶりに大暴れだ！！」

「お前、武みたいに不吉なことを言うなよ！！」

「気合いれだよ！！気合いれ！！」

まったくコイツは……

まぁ、いいか。今回の敵は大暴れだなんだとかじゃないと、やっていけないからな！！

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

「はぁ……はぁ……はぁ……そんな、私たち三人の魔法でもまだ、倒せないの…」

自身の魔力を全て出しきったスターライトブレイカー。しかし、すぐさま修復プログラムが働き消し飛んだ部分を修復していく。

なのはもそうだが、フェイトとはやても誠とシュウキ（特に誠）に負担をかけまいと魔力を大幅に削ったため、肩で息をするほど。飛んでいるのがやっとなほど。

「やっぱり、誠たちには無理だよ……」

「誠くん……」

『誠……』

はやてにユニゾンしているリインフォースも心配する。

その時、修復していく防衛プログラムに近づいていく飛行物体が見える。シュウキの茶色大鷲だ。背には誠（響鬼）とシュウキ（衆鬼）が乗っている。

「修復途中ならチャンスだ！！はぁっ！！」

響鬼が先に飛び降りる。降下している時に、ベルトにある音撃鼓を取り外し防衛プログラムの甲羅のような部分に投げる。
甲羅に着いた音撃鼓は回転しながら巨大になっていく。
響鬼もその上に乗り、音撃棒・烈火を構える。

「行くぞ！！音撃打・豪火連舞の型！！」

交互に音撃棒を降り下ろし初め、次に同時に音撃棒を降り下ろす。
そして、最後に音撃棒を高く降りあげて、音撃鼓を叩きまくる。音撃打『火炎連打』『一気火勢』『猛火怒涛』の３つを複合させた最強の音撃打だ。

叩いているだけで、音撃鼓からの衝撃波がクロノの魔法で凍結している海に亀裂が入り、空間が歪んで見える。

音撃打を喰らっている防衛プログラムは清めの音で内部から破壊されているのにもがきだす。

あらゆる部位から腕やら触手が飛び出し、響鬼を退かせようとする。

しかし、

「悪いが、こっちも忘れんなよ！！」

茶色大鷲に乗っている衆鬼が音撃管・衆牙を出し、部位から出たのを狙い射つ。
誠に襲いかかるのを優先して狙い、誠のサポートに回る。

その様子を見ているユーノ達は、取り付いて攻撃をする誠にただただ驚く。

「すごい……こっちまで、太鼓の轟音が」

「今さらだけど。アイツ、本当に何もんなんだ」

「はあああああ！！はあっ！！」

最後の叩きを入れる響鬼。久しぶりに全力で叩きこんだ音撃。防衛プログラムは音撃を叩きこまれ部分部分が爆発し始める。

「（やったか）……くっ」

しかし、破壊された部分から新たな身体が再生していく。
だが、再生はされていくが超速再生はできないようで、ゆっくりと再生していく。

「再生なんか、させるか！！」

音撃鳴を衆牙に取り付け、必殺技の構えに入るシュウキ。

「音撃射・衆牙破裂！！」

トランペットを吹くように、それに似合う演奏が聴こえる。衆鬼が攻撃しているのは、響鬼の攻撃で内部が露出している先に見える大きな輝き。そう、防衛プログラムのコアに直接攻撃をしているのだ。響鬼が固い甲羅を破壊してくれたおかげ、攻撃がダイレクトにコアに届く。
今まで、一番の苦しみをあげる防衛プログラム。

しかし、巨大な尻尾のような物が衆鬼が乗る茶色大鷲めがけて降り下ろされる。

「避けろ衆鬼！！！」

響鬼が尻尾に気付き、衆鬼に大声で呼び掛ける。

「はっ！？ぐあっ！？」

衆鬼も気付き、茶色大鷲で避けさせようとするが尻尾が茶色大鷲に当たり、衆鬼が放り出された。

そのまま、海上に一直線に落ちついく。

「シュウキさん！！はあっ！！」

ユーノが手をかざし、シュウキの落ちてくるであろう場所に魔法陣

を展開する。衆鬼は魔法陣でバウンドするように受け止められた。

「危なかった～。ありがとうユーノくん！！」

「いえ、これぐらい！！」

「でも、せっかくの攻撃のチャンスが……あっ」

空から茶色大鷲のディスクが落ちてきた。
それを手に取る衆鬼。頑丈にできている茶色大鷲が元のディスクに戻る。
ディスクアニマルは手入れをしなくてはいけない。いつもなら、本部や支部で手入れをして貰っているが、この世界ではそれがないしできない。限界が来ていたのだ。

「（マコッチ……どうするんだ？いくら響鬼でも、鬼神じゃないんだ。なんでアームドにならないんだ？何か策があるなら早く出した方がいい！！）」

衆鬼が早めに防衛プログラムを倒した方がいいと思う。そして、なぜ鬼神（もとい装甲響鬼）にならず、響鬼で挑んだのかもわからない。
しかし、響鬼の余裕の物言い。

「さてと……やるか。行きますよ響鬼さん」

キイィィィン！！

装甲声刃を出し、腰にぶら下げている音角を刃に叩く。

音角は一瞬光ると、刀《響鳴剣》の姿になる。

次の瞬間、響鬼の身体から紫色の炎が舞い上がる。

同時に右手に持つ響鳴剣も連動するように紫色の炎が出る。

「行くぞ……響鬼・響鳴！！」

つづく

プロローグ・弐（後書き）

次回、ついに明かされる《響鳴》の力。

その力を解放した誠が防衛プログラムに止めをさす！！

しかし、誠は……

次回は、自分が考えた響鬼の新しいフォームです。

そして、マテリアル編……外伝編でやりまーす！！つまり、本編とは関係なくやります。

誠とシュウキが主役です。

そして、更にその後は、第三章が始まり音撃戦士が続々登場します！！

感想や意見待ってます！！

A' s編第３３話《その名は響鳴響鬼》（前書き）

今回は短いです

A' s編第３３話《その名は響鳴響鬼》

「うおおおおぉぉーー！！！！！」

響鬼の身体から、燃え盛る炎。その炎が響鬼の鎧に変化を表していく。

装甲とは違い、それほどの重装ではなく、より軽々しくなった姿。額の部分は鬼の模様ではなく《響》と印されており、背中には、先ほどの響鳴剣が更に姿を変えた、装甲声刃のように近代的な剣になり背中に背負っている。

「はあああっ！！！！！！！」

炎を振り払い、新たなる姿（フォーム）に変身した響鬼。
響鳴響鬼、または響鬼・響鳴フォームである。

「さぁ、この姿が何分持つかわからねえから、一撃で終わらせる！！！」

背中に背負っている響鳴剣を抜く。
両手で構えて、闇の書の防衛プログラムに向き合うようにする。よ

く見ると、刀身が小刻みに震えて青白く光っている。

「行くぞ……音撃響鳴・響震弐閃！！」

響鳴剣を横一文字に振りかぶり、青白い斬撃が防衛プログラムに放たれた。振りかぶると同時に『キイィィィン！！』と言う大きな音が響く。余りの大きさに、見守っているなのはたちは思わず耳を閉じる。

「くぅぅ！！耳が！！」

「なんだよ、この高い音は！？」

ヴィータには嫌な音なのか、涙目になりながら叫ぶ。

「シュウキさんこれは！？」

「わからない！！俺も初めてみた！！」

シュウキも響鬼に起こった変化に驚いていた。

そして、響鬼が振りかぶった斬撃は防衛プログラムに当たる。

しかし、斬撃は当たると同時に消えた。

これを見ていたなのは達は「え？」と言った。

シュウキも「まさか、失敗？」と言っている。

しかし、刹那

突然、防衛プログラムの身体から亀裂が入る。その亀裂が様々な箇所に現れ、まるで音がその響きを止めないようにどんどん伝染していく。そして、防衛プログラムはバラバラに砕け散り、跡形もなくなっていく。再生しようとするが、全くできなくなり、その身体が最後の欠片になるまで音が響き渡っていた。

「え……終わったの？」

なのはが唖然とするようにポツリと言った。

「凄い……本当に凄いよ誠…」

フェイトがゴクリと息を飲み、防衛プログラムがあった場所を見つめた。

「……今さらやけど鬼って、悪いイメージがあったけど。そんなんちゃうんや。私にとっては、とってもカッコエエ鬼さんや」

少し涙目ではやてがクロノの凍結魔法でできた氷の上に立っている誠を見て言った。

「ったく、マコッチ。響鬼に変身しただけでも驚くのにあんな凄い技持ってたなんて……（ますます煉鬼の闘争本能剥き出しになるな……）」

若干冷や汗で思う。

皆がそれぞれ安堵の気持ちで誠のいるところまで行こうとする。なのは、フェイト、はやては少し早めに向かって行く。

しかし、

「ぐあああああぁぁあ！！！！？？？」

突然、誠が叫び声をあげる。響鳴剣を手放し、身体中から火花と鮮血が鎧から吹き出す。

そのまま変身が解け、血だらけの誠が氷上の上に倒れた。

なのは達は一体何が起きたのかわからなかった……

ただわかるのは誠が真っ赤になって倒れているだけ……

それを見たフェイトは思考が停止していた。

「あ…ああ……ま……まことおおぉぉ！！！！！！！！！！！！」

A' s編第３３話《その名は響鳴響鬼》（後書き）

次回

防衛プログラムを完全に消滅させた響鬼。

しかし、突然の重症に倒れた誠。

なぜ？

そして、始まる新たなる物語。

次回A' s編完結！！！

感想など待ってます！！

その前に、技とか主人公の新設定とかやるかな？

そろそろコイツらでるか……

とある山岳地帯……

武「おおぉぉおおぉぉおおぉぉ！！！！アイツはどこなんだああ！！」

礼羽「誰か止められないんですか？」

勇「俺だって止めたいけど。兄さんがああなったら……誠さん、お願いですから早く帰ってきてください！！！」

A' s編第３４話《始まりの響き》前編（前書き）

A' s編　完結前編です！！

長かった……

A' s編第３４話《始まりの響き》前編

『少年。この《響鳴》を使う時は、必ず少年は致命傷の傷を負う』

『必ずですか？』

『ああ。本来この技は強力すぎる上に、非常に危険な諸刃の剣だ。本当なら相当の修行と鍛練を詰まないといけない』

『なら、《響鳴》はすぐには使えないんじゃ』

『いや、使えるには使えるんだ。だがな、技の反動が凄まじいんだ』

目を瞑り、手を組む響鬼。

『反動ですか？一体どんな技なんですか？』

『少年は音が鳴ったら、暫くは響くのは知ってるだろ？』

『反響ですよね？』

『まぁ、そうだな。その剣はそれを瞬時に発動できる。技を発動させたら、斬られた者は斬撃が全身に周り音がなりやむまで斬撃が続く』

言葉だけでは簡単な事に聞こえるが、実際はとんでもない最強の技だ。

技を食らえば音がなりやむまで永遠に切り刻まれ続けるのだ。最終的には欠片をも残さず消え失せる。

しかし、反面

『少年、もう一度言うが修行も鍛練も出来ていないお前がこの技を使えば確実に……』

『わかってますよ。響鬼さんだってそれを承知で俺に教えたんでしょ？大丈夫です、俺は伊達に鍛えてませんから』

『ふっ、相変わらずだな。少年、しっかりやれよ。怪我したら、怪我したらだ』

『響鬼さんだって、相変わらずアバウトじゃないですか』

『ハハッ、お互いな』

『ええ……』

そうだ、俺はいずれはこの技を習得しないといけない。

もっと強くなるためには……

「う……ん……はっ！！ここは、いっつぅ！」

ベッドの上で目を覚ました誠。飛び起きるが右腕に激痛が走る。左手で思わず右腕を握りしめる。ゆっくり手を放し、右腕をだらんとさせた。いつの間にか、患者の服を着せられており、身体や頭に包帯が巻かれていた。

痛みは今のところ、右腕の激痛だけだ。

誠は自分のいる部屋を見渡した。そこには、フェイトとなのはが自分のベッドで眠っており、隣のベッドにははやてとヴィータが一瞬に寝ていた。

なぜかリインフォースが自分のベッドに潜りこもうとしている一歩

出前で寝息をたてて寝ていた。

「うん……誠…誠！！」

誠が起きて起きたのか、フェイトが目をすすりながら起きた。まだ寝ぼけてると思いきや、　誠を見るなり覚醒して抱きついた。

それに続くかのように、次々と目を覚ます面々。

「誠くん、起きたんだね！！」

「おめえ、大丈夫か！？」

「誠くん、ほんまに殺生やで！！」

「誠、無事で良かった！！」

なのは、ヴィータ、はやて、リインフォースが一気に誠に詰め寄る。

まあ、はやては四つん這いだが。

「ば、ばか！！そんなに近づくな！！ってはやてどこに乗ってんだ！！」

「ここしかないんやもん！！」

はやてが馬乗りになって誠に言う。どこにそんな力があるんだ。

すると、病室の扉が開き次々と人が入って来た。

「誠さん、目が覚めたんですか！！良かった！！」

「ったく誠！！あんたどんだけ無茶苦茶な奴なんだい！！」

「でも、傷は意外に浅かったですから」

「シャマルに感謝してよ誠くん？」

「お前が無事で良かった。なっ、リインフォース！！貴様、どさくさに紛れて誠に何を！！」

「なっ！？わ、私は別に何も！！／／／」

上からユーノ、アルフ、シャマル、エイミィ、シグナムが入って来た。

最後にクロノ、リンディ、ザフィーラ。

そして……

「マコッチ！！！良かったあああぁぁぁ！！」

何かを手に持ちやって来たシュウキ。

「マコッチじゃない！！ああ、ちょっといい加減離れてくれないかフェイト？ついでにはやて達も」

誠が未だに抱きついたままのフェイトに言う。

「うう……誠がいけないんだよ／／／あんな事に……」

少し涙目のフェイトがゆっくり放してベッドから降りる。

「悪かったよ。まさか、身体がぶっ飛ぶなんて思わなかったからな！！」

頭に左手を当てて、笑いながら言う誠。

そんな誠の態度になのはとはやては。

「笑ってる場合じゃないよ！！死んだかと思ったんだよ！！」

「そうや！！いきなりあんな血い流して、とっても心配したんやで！！」

涙目で本当に怒ってるなのはとはやて。
確認することではないが、なのは達は９歳、誠は１７歳である。

「あ……えっと……」

誠はどうしていいかわからなくなる。
因みにフェイトを始めリインフォースやヴィータ、シグナムもはやて達と同じ気持ちだ。
そんな誠にシュウキが助け船を出す。

「まぁまぁ、誠が大丈夫って言ってるんなら。それは大丈夫なんだよ。ほら、皆あれから何も食べてないから、俺がお菓子作ったから皆食堂に来なよ」

「そうね。皆お腹が空いたでしょ？シュウキくんのを頂きましょ？」

「でも、誠くんは？」

なのはがおそらくまだ歩けないであろう誠を気遣う。

「大丈夫だって、俺が車椅子とか使って持っていくから」

「俺は荷物か！！」

誠がシュウキに向かって突っ込む。

そして、シュウキとリンディの言葉にしぶしぶ納得したなのは達は食堂へと向かっていく。

「さてと、俺もお前が作ったお菓子でも食べるか」

そう言ってベッドから降りる誠。

「待てよ誠。なんだよあの技？それにお前右腕が少し震えてるぞ？」

シュウキが誠の異変に気づかない訳がなく。誠に問う。

「あの技は音を用いた斬撃。としか言いようがない」

「言いようがないって！！あんな技見たことないぞ！！それに音を用いるって！！それにあの姿にお前の傷！！」

「詳しい事は俺もあんまりわからないんだ。ただわかるのは、もうあの技は使わない。それだけだ」

ゆっくりと立ち上がり、壁にかかっている自分の着ていた服に着替え始める。

「使わない？もう何の事かわからないぞ？」

「俺もわからないんだから、いいだろ？」

「誠、俺達音撃戦士が一番してはいけないのは、自分一人で背負い込むことだぞ？無理して怪我を隠すとか、仲間に迷惑がかからないようにすることが一番いけないって、言ってたの響鬼さんだろ！！その右腕はなんだ！！」

「ぐぅ！！」

シュウキが右腕を掴む。誠は顔が一瞬歪む。

「あの技使ったからだろ？」

「ああ、そうだ。最後に右手で振りかぶったから反動が右手や右腕に集中したんだよ」

「反動？なんだその技は？」

「響鬼さんにでも聞いてみろ」

「いないからマコッチに聞いてるんだろ！！そんな障害があったら、誰が一体俺の助手をするんだあああ！！」

「心配してたのそれか！！？？ってかお前の弟か妹に頼めえ！！」

「カガリやカズラは食べて貰うんだよ！！」

「お前鬼辞めて、パティシエになれ！！」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

そのあと、誠とシュウキは部屋を出て食堂へと足を進める二人。その間に誠がシュウキに事情を説明した。

「なるほど。古から伝わる奥義を使ったってわけか」

「ああ。だから……もう響鳴は使わない。俺が鍛え治して、より深い音撃を習得してから使うさ」

「だな。でも、あんなデッカイのを一撃で倒したのは凄かった。いや、もっとかかるかと思ったぞ」

「いや、実際は鬼神でも倒せた敵だ」

「え？」

「鬼神覚声で斬るのも出来たけど、あれだけの再生能力。でも、なのは達が頑張ってくれたんだ。だから、賭けにでるより確実に倒せる方法を使ったんだ」

「へ～。って俺は援護する必要なかったんじゃないのか？」

そう考えるならシュウキは別に援護は向かって来ないで良かったのではと思う。

「……誰が囮するんだ？」

誠が真顔でシュウキにいい放つ。

「囮かよ～！？」

「はいはい、冗談だ。ほら、着いたぞ」

手を振って冗談をアピールする誠。

「（絶対囮だったな……）」

と思うシュウキ。

食堂に付くと、皆既に座っておりテーブルには既にデザートが並ん

でいた。

「チョコバナナか。案外、シンプルなの作ったな」

そう言って、なぜかぽっかりと皆が座っついる真ん中が空いている席に座る誠。
囲むようになのはが右にフェイトが左にはやてが真正面に来るように座っていた。

「誠くん、遅かったね？」

「着替えてたんやろ？」

「正解」

誠が左手でフォークを掴みチョコバナナに指す。

「あれ誠って左利きだっけ？」

フェイトが誠が左手で食べているのに不思議がる。

「俺は両利きなんだ。まぁ、たまには左手でもいいだろ？」

「へ～」

「ところで、君が防衛プログラムを倒した時に使ったあの技は一体何なんだ？」

皆が一番聞きたいことをクロノが聞いてきた。
その言葉に皆の視線が誠に集まる。

「（来たよ……）」

誠が心の中でため息をつく。

「俺の音撃を使った斬撃攻撃。それ以上でもそれ以外でもない。それだけ」

「なっ！？そんなので、納得できるわけ！！」

クロノが立ち上がり、当然納得できるわけもなく反論しようとする。

「そうだ、誠。お前が使った技は明らかに異常な力だった。それにあの時の苦しみ方は……」

「シグナムの言う通りや。誠くん、なんか隠してるやろ？」

「何も隠してない。それより、はやてたちこそ大丈夫なのか？」

誠がよそ見をしながら、はやての質問を流して話題を変えた。

「え？私らか？」

「ああ、処遇だ」

「それなら、彼女たちは管理局に奉仕という形で入局して貰うことになっている」

「まあクロッチが色々と手を回してくれたおかげだね」

シュウキが横目でクロノを見て言った。

「クロッチじゃない！！言っておくが君たち二人はアースラで色々

として貰うからな」

「はあ～！？」

「色々ってトイレ掃除とか？」

「それもあるな。君たちがぶっ壊してくれた扉の件もあるし」

クロノが怒りマークを浮かばせて、腕を組む。

「ああ～、そういえばあったな。シュウキを助けるために倉庫の扉、破壊したな」

「やっぱりバレてたんですよ」

ユーノが呆れるように言う。

「ともかく君たちは未だに次元漂流者扱いだから、守護騎士たちやはやてみたいに管理局に入れる事はできないんだ。だからと言って罪になんかできないんだこれだけの処分になっただけでもありがたく思うんだ！！……って皆は！？」

いつの間にか、ユーノ以外いなくなっているのに気がつくクロノ。

「皆、それぞれ帰っていっちゃったよ。『話なんか聞いてられるか』って」

「ったく、逃げたな」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

海鳴海浜公園

「皆、忘れてると思うけど明後日はクリスマスだ！！感謝を込めて、俺が最高のクリスマスケーキとデザートを用意してやろう！！」

シュウキが滑り台の上に乗り、高々と宣言する。

「場所はどうすんだ？」

「それなら、私たちが住んでマンションなら……」

「翠屋の方が広いよ！！」

「私の家も広いから、クリスマスパーティーはそこでや！！」

三人がどこでやるかをで言い合いを始めた。

「おいおい、その前に三人にはやることがあるだろ？アリサちゃんやすずかちゃんに話さないといけないんだろ？それになのはは何時までも黙ってるわけにはいかないだろ？」

エイミィから聞いた話だが、あの戦いの時にアリサとすずかが目撃してしまっているらしい。　更に、なのはとフェイトも本格的に管理局員になるらしい（というか、子供を雇うなんて余程管理局は人員がないんだなと思う誠）ので桃子や士郎に言わないといけない。

「あ、うん。そうだね、ちゃんと話さないといけないもんね」

「そうだ。それに今日はもう遅いし、また明日にしよう。俺も傷治さないといけないしな」

「そうやな、なら皆私の家に集合や！！」

はやてがそう言うと、皆もそれに納得し、それぞれが帰路に着こうとしていた。

しかし、再びはやてのある言葉でなのは、フェイトは反論することになる。

「さっ、誠くんも一緒に帰ろうな？」

「え？」

「はやて！？」

「はやてちゃん！？誠くんは私の家で生活してるんだよ！！」

「やから、今日から誠くんは私の家で……」

「主はやて、誠を泊まらせるんですか？」

なぜかリインフォースが話に乗ってきた。

「う？リインフォースも誠くんが来るの賛成なんやろ？」

「え？は、はい！！／／／」

「ってはやてちゃん！！勝手に話を進めないでよ！！」

「そうだよ、はやて！！今日は私の家に呼ぶんだよ！！」

とうとう騒ぎだすなのは達。

「ハハハ（俺はアースラでもいいんだけどな……眠い）」

当の本人は、ブランコに乗りはやて達の話を苦笑いで見ていた。

祝５０００ＰＶ突破記念！！音撃戦士・登場人物之巻《第三章における二人の主人

久しぶりの投稿。

待たせた皆さん。

今回はこれからの主人公設定です。

祝５０００ＰＶ突破記念！！音撃戦士・登場人物之巻《第三章における二人の主人公》

名前：新藤　誠

年齢：１７歳（因みに誕生日は１月２日）

好きなもの：辛い食べ物、登山

嫌いなもの：苦い食べ物、ホラー系、機械類（嫌いと言うより苦手）

鬼名：響鬼、または鬼神

装備：変身音叉・音角、音撃棒・烈火、音撃鼓・火炎鼓、音撃増幅剣・鬼神装甲声刃、音響鳴震刃・響鳴剣

人物：この物語の主人公。元々は《音撃戦士と魔化魍が戦う世界》の住人。日本中を放浪と言う名の旅をして魔化魍を退治している。所属は関東支部（滅多に顔を出さないが…）。旅の途中で祠を発見し、謎の光で《リリカルなのはの世界》に行ってしまう。フェイトやアルフと言った魔導師達と出会う。そして、フラグをばらまくメーカーで本人は恋愛に超鈍感。現在なのは、フェイト、はやて、シグナム、リインフォースが好意を寄せられている（誠は全然気づいてない）。

Ａ'ｓ編終盤で響鬼に変身出来るようになった。

性格は明るく優しく、時折ツッコミもかます。余り怒らないがキレると怖い。幽霊類が大の苦手で、幽霊関連になると普段では考えら

れないほど慌て、最悪失神する。しかし、それ以外は信念、精神が強い（幽霊類は人間苦手なものは必ずあるから鍛えようがないらしい。しかし幽霊の存在は断じて信じてない）。料理は得意でカレーやシチュー類が得意（誠が作るカレーは普通より辛いらしい）。意外に機械音痴で携帯電話はメールと通話がやっと（これは師匠ことヒビキが機械音痴の影響）。

身体能力及び戦闘能力は非常に高く、鬼にならなくても音撃が打てたりでき、鬼神と言う名に恥じない強さ。が、そのせいもあってかとある人物に戦いを挑まれる。

過去は不明で、余り話そうとはしない。わかっているのは家族はある人物に殺されているらしい。そして、師匠ヒビキも死別している。

交友関係：猛士に所属し、音撃戦士たちとは仲が良い。特にシュウキとは修行時代からの悪友（シュウキは親友と言っている）。そのためのシュウキの弟カガリと妹カズラとも面識がある。礼羽《玄鬼》とは良い弟分のような立場で、時々、二人で魔化魍退治に行ったりする。そして、一番誠を困惑させているのが六道　武で、会うたんびに決闘を申し込まれている。お互い犬猿の仲だが、互いに力を認めあっているらしい（本当かどうか不明）。でなければ、強さを求める武が誠に戦いなど挑まない（過去の因縁があるとかないとか）。唯一馬が合うのは辛い食べ物系。

そして、リリカルなのはの世界ではフェイトを始め、交友が広がっている。因みに三人娘から心配や説教させられ、少し屈辱らしい（なんで9歳時に……らしい）。しかし、女の子には優しくというヒビキの言葉で言い返せない（ヘタレ化が進行）。

名前：六道　武

年齢：１８歳

好きなもの：和（なんと言おう和）、強い奴との戦い、辛い食べ物

嫌いなもの：豆類、洋（パンなんて吐き気がするらしい）

鬼名：煉鬼

装備：変身音叉・煉角、音撃棒・獄炎

人物：第三章におけるもう一人の主人公。元は大昔の人物で、現代に何らかの事象でタイムスリップしてきた。一匹狼で日本中を放浪している（というより、誠を探しだすための旅）。因みに弟の方が出来が良い。だが、戦闘バカだが、漢字は非常に強く、字が上手い。だが、現代知識に非常に乏しく、外国語が言えない。

性格：ひたすら力を求めて、強いとの戦いを好む武闘派な性格。口

が悪く、年上にも普通にタメ口（使うのは師のカブキのみ）。見てくれも不良みたいで、怖いイメージがあるが、意外に子供好き。更に何故か豆が嫌いで誠同様に普段では考えられない行動とることも。因みに誠とは意見が合わないのは有名らしい。他人の指図を受けるのが大嫌いで、正に我が道を行く性格。

身体能力と戦闘力は誠に並び非常に高い。

過去：余り多くは語らず。弟の勇は唯一の肉親であり、普段はまんざらな扱いをしているがとても大切に思っている。しかし、元いた世界が世界な為、子供が闘うと言うのは決して認めない主義（時空管理局と馬が合うのはまずないだろう）。

誠とは意外な因縁と関係がある……多分

交友関係：形として一様は猛士に所属している（関東支部）が全くと行っていいほど現れないが、全国で鬼と知り合っている。特にシュウキとは子供好きで、時々幼稚園や保育園に行ったりしている（という無理やり）。なのでシュウキの事を《菓子野郎》又は《誘拐野郎》とよんでいる。

そして、誠とは最早犬猿の仲で、武が勝負を吹っ掛ける→誠が逃げる→武が追いかける→日本中が鬼ごっこ状態が当たり前の状況。実際、武が誠に勝負を挑むのは純粋に誠が最強と呼ばれる鬼神であるとともに、ある理由があるため。

だが、実際に二人が本気で闘うとなると、回りが焦土とかすか、両方死ぬらしい（勇談）。

なのはたちとどう絡むかは今後次第。

祝５０００ＰＶ突破記念！！音撃戦士・登場人物之巻《第三章における二人の主人

鬼神「ということで今回は第三章の主人公設定だ」

シュウキ「マコッチと武が主人公かどんな物語りになるんだ？」

礼羽（玄鬼）「響鬼さんはともかく煉鬼さんが主人公になったらこの小説焼き付くされるんじゃないんですか？」

勇（影鬼）「いやいや、礼羽！！やっと兄さんが本編で活躍できる上に主人公だよ！！どんでもない大出世だよ、こりゃあ！！」

シュウキ「勇の言う通りだ。ってか俺たちの扱いは！？」

鬼神「安心しろ。君たちは次回で音撃戦士紹介で紹介してやるよ。みんなをな！！」

カガリ（火鬼）「やっと俺もシュウ兄みたいに本編でられるのか……というかシュウ兄、もう活躍したから出なくてもいいんじゃないの？」

シュウキ「おいおい、カガリ。何言ってんの？俺は出るよ！！頑張って活躍だぁ！！」

礼羽「シュウキさん……僕たちも出ますから活躍はぐんと減りますよ？」

シュウキ「いやあああああ！！」

勇「あれ、そういえば誠さんと兄さんは？」

礼羽「さあ、多分今頃おいかけっこしてるのでは？」

鬼神「まあ、という事だから次にやるのは音撃戦士紹介だから！！その前にA' sを完結させるぜ！！だけど、闇のマテリアルの名前がどれにすればいい迷っている！！！」

とりあえず、皆様にも考えてたくさん案を出すか

闇のマテリアルたちも後に重要な役割があるしな。

うん……

感想にマテリアル三人娘の名前があったら載せてください！！

勿論、活動報告に書いてくれたユーザー様も何個でも構いません！！！

第三章《プロローグ》（前書き）

半年の放置……

まともに小説を読めない、書けない現実の社会生活。

しかし、私は終わらせるまで例え何年たっても書きます。

ということで最終章始まります。A' s編の最後が意味不明に終わっていますが、ネタが思い付きませんでした。気になっていた方も気にならなかったひともすみませんでした。

感想も悪い点でもなんでもどうぞ。

第三章《プロローグ》

ダンダンと、リズムよく聞こえてくる太鼓の音。その太鼓の音はとても力強く、迫力ある音を出していた。
そして、その太鼓の前で振るっているのは、まだ十歳にも満たない少年が鳴らしていた。

「ああ、ストップストップ！！一回止めだ、少年！」

突然、太鼓の音を遮るように大きな声が響く。声の主は、二十代後半の男性だ。
その男性に言われるように少年は叩くのを止めて、流れる汗を拭きながら男性の方を見た。

「どうしたんですか響鬼さん？」

「どうしたんじゃないよ。どうして、こうを心を籠めてってさ、ああ、なんていえば……」

何かを伝えたいが上手く言葉が思い浮かばない響鬼と呼ばれる男性。
そんな響鬼を見て、少年は言う。

「心なら……ちゃんと籠めて叩いてます」

「少年のは、見てるとただ力だけを籠めてるようにしか見えないんだ。前にも言ったけど、鬼は回りにある響きを味方に着けないといけないんだ」

「ぼくはちゃんと響鬼さんに言ってる通りにしてます。ちゃんと……テントに戻ってます」

「あ、少年！！」

少年は一人、走って行ってしまう。

「（心を籠めてる打ってる！！そうだ、ぼくはアイツを……アイツを……！！）」

「！！！……夢…」

突然に目を冷ました誠。ソファーの上に横になり毛布をかけられていた。若干汗をながしているが、外は一桁をきりそうな程の寒さ。暑い汗もすぐに、冷しいくらいになる。
日射しもリビングの窓から少し入っており、どうやら朝のようだ。

「はぁ、昔の夢なんて……しかもあんまりいい場面じゃないし……」

ソファーから立ち上がり、あんまり良くない目覚めにテンションが下がる誠。

「あ、誠くんおやよう。早起きなんやね」

リビングの扉が開く音がし、車イスのハンドルを操作してきた、この家の主、八神はやてが起きてきた。

「おやよう。今日はまぁ、偶々かな。はやては朝食の準備？」

「うん。あっ、誠くんも起きたんなら一緒に作るの手伝ってくれへん？」

「ああ、わかった。今そっちに、うおっ！！？」

キッチンに向かおうと、歩いていくと足に何か触ったのに驚いた。何かと思ってすぐに下を向くとそれはすぐにわかった。

「何をそんなに驚いている誠。何かあったのか」

下に居たのは床のカーペットで眠っていたザフィーラだった。

「いや、別に何も。おはようザフィーラ……」

「うむ、おはよう」

軽くあいさつすると、ザフィーラははやての方に向かい、同じく朝のあいさつをする。

「まさか、ザフィーラが寝てたなんて…全然気づかなかった」

誠はザフィーラに後に続くようにはやてのいる台所に向かう。
そのまま、台所の流し台で顔を洗う。
それを見ていたはやては

「誠くん、顔は洗面所で洗ってな?」

「顔を洗うのに、場所は関係ない関係ない。洗面所も流し台も対して変わらない。あ、タオル忘れてた」

目を瞑って、タオルを持ってくるのを忘れたことに気づく。

「……誠くん、ここにタオルあるえ。はい／／／」

はやてが誠の服をクイクイ引っ張り、タオルがあるのを教えるが。

「悪いはやて……って、これエプロンじゃないか！？」

誠ははやてに渡された物を掴みしゃがんで顔を拭く。しかし、なぜかタオルに違和感を感じる。はやてから渡されたのは今現在はやてが身に付けているエプロンだった。

「あはは、まるで夫婦みたいやな／／／」

顔を赤くして、まるで仲良し夫婦が朝のラブラブ感を出すかのように空気が漂う（はやてのみ）。

「おはようございます。随分と朝から楽しそうですね。主はやて？」

と、そこにリインフォースが実に面白くない顔で台所に表れた。

「リインフォース、丁度よかった。これテーブルに並べて置いてくれないか？」

お盆に載っている食器をリインフォースに渡す誠。

「ああ、わかった／／／」

誠が現れると、リインフォースは面白くない顔から一転して普通の表情に戻り若干赤くなって、食器を並べにいく。

「そろそろ、味噌入れていいんじゃないか？」

「そうやね。誠くん冷蔵庫から…」

「味噌だろ？え～と」

冷蔵庫を開けて、一番重要な味噌を取り出す誠。

「う～おはよ～」

うしろから声が聞こえ、後ろを向くとヴィータが目を擦りながら歩

いてきた。

「おはよう、ヴィータ。顔は洗ったか？目、擦ってるみたいだが…」

「まだ～」

「だったら、早く洗って、目を覚ましてくるんだ」

「ミルク飲んでから」

「ミルク？そんなの作ってたっけ？なぁ、はやて」

はやての方に向いて、ミルクがあるか聞く。

「あ、しもた。今日に限って作るの忘れてわ。ごめんなヴィータ」

「えええぇ！！はやてが作ったミルク飲みたかったのに！！」

ヴィータはいつの間にか日課となっていた、はやてが朝に入れてくれるホットミルクを楽しみにしていたが、今日ははやてが珍しく忘れていたので作ってはいなかった。

「なぁ、はやて！！今からミルク作ってよ！！」

「でも、もう朝食ができるからな」

「うぅ……なら、誠。お前が作ってくれよ」

「なんで俺に言うんだ？もう朝飯が出来るんだ。味噌汁飲んで暖まるんだな。それより早く顔を洗う！！」

「うわっ、押すなよ誠！！」

そう言ってヴィータの背中を押して洗面所に向かう誠。

「あっ、誠くん味噌いれんで行ってもうた……」

結局、味噌ははやてが入れることに……

「もう～どうして私を起こしてくれなかったのシグナム！？」

「私は何回も起こしたが一向に起きようとしなかったのはお前だぞシャマル？」

朝食をとり始め、朝いなかったシャマルは寝坊して起きたのをシグナムのせいにする。

「そう言えば朝食作ってる時、シャマルの姿なかったな」

「ひど～い、まるで私が影が薄い見たいな言い方じゃない！？」

誠の言葉にショックするシャマル。
そんな朝の光景をクスクスと笑うはやてたち。

『昨夜、海鳴市近隣の森林に切断された腕が発見された事件で警察は……』

テレビから聞こえてくる今朝のニュース。どうやら、ヴィータがリモコンを握ってテレビをつけた。

「うげぇ、全く朝から嫌なニュースだな」

「こら、ヴィータ。御飯食べる時は、テレビは消さないとあかんよ」

「それにしても、切断された腕だなんて物騒ね」

先ほどの怒りは収まったのか、シャマルはニュースの内容が気になる。

「世の中には、どんな輩がいるかはわからんからな。我々も十分注意しないとな」

「主はやてもきおつけて下さい」

「あはは、ありがとうなリインフォース。あっ、ヴィータはテレビを消してな」

「わかったよはやて。あたしもつけなきゃよかったよ」

そう言って、テレビを消そうとするヴィータ。

「ヴィータちょっと待て」

誠が消すのをやめるように言う。そして、誠はニュースの内容を聞いた。

『尚、現場近くからは、バラバラに破かれた衣服が発見されており、謎の穴が多数確認されているとの事です。また、付近に住んでいる住人から遺体が発見された近くにある山小屋が破壊されているのも確認されており、事件との関連があるか捜査を進めているとのことです』

ここでニュースの内容が終わる。
ニュースを聞いた誠は嫌な予感が頭を過る。

「……まさか……」

「ん？どうしたんや誠くん？」

誠が突然深刻な顔をしたのにはやてが疑問に思う。それはシグナムたちも同じだった。

「今のニュースに何か気になる事があったのか誠？」

「気になるも何も……あれは人間がやったのじゃない」

「どういう意味だ？」

「言葉通りだ、あれは人間が殺したんじゃない……ともかく、俺は出かける」

そう言って誠は椅子から立ち上がり、そのまま玄関の方に向かって行った。

「あっ、誠くん！？どないしたんや！！まだ、食事中やで！？それに何処にいくんや！！」

「悪いはやて。今日の夕食は俺が作るからそれで勘弁してくれ！！それといく場所はフェイト達がいるマンションだ！！」

その言葉を最後に誠は家から出ていく。

家から出た誠は急いでフェイト達がいるマンションの方に走っていく。

「そんな馬鹿な！！この世界に魔化魍が……〝ツチグモ〟が出てくるなんて……」

最悪の事態が襲いかかろうとしているのは、今の誠たちには知るよしもなかった……

「うふふ、ようやく会えるわね〝鬼神〟。貴方に会うためにわざわざこの世界にきたんだから。ちゃんとこの〝百目鬼〟に力を見せて頂戴ね」

海鳴市を一望出来る丘の上から不気味な装束を纏う女性が見つめていた……

敵は、次元を越えて誠を狙っていた。

最終章：最凶最悪の鬼・覇鬼降臨編

崩壊を呼ぶ音撃が今、鳴り響く……

第三章《プロローグ》（後書き）

ついに現れた、魔化魍と第三の鬼、《百目鬼》。

果たしてなぜ、彼女が現れたのか？

魔化魍がなぜ、この世界にあらわれたのか、次第に明らかになっていきます。

そして、明かされていく誠の過去……

因みに百目鬼のキャラは《東方双界伝　Ａｎｏｔｈｅｒ　Ｆａｎｔａｓｔｉｃ　Ｗｏｒｌｄ．》を執筆していらっしゃる白米さんが考えてくれたキャラクターです。

白米さん、お待たせしました。

ついに百目鬼が出ます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0501s/

魔法少女リリカルなのは～音撃を使う鬼神～

2011年12月28日23時53分発行